

の連続となる。すぐれた父母の血を継いだ観察力と決断力は、台所で研ぎ澄まされて、実学の基本を形成したと偲ばれる。

フキ *Petasites japonicus*、ワラビ *Pteridium aquilinum*、タケノコなどの山野草は、「アケ抜き」作業を必要とすることも、調理を通じて学習させられる。

万人に吸収できる理論を構築する実験実習と言えよう。

当時の農家は、漬物、味噌、醤油を自家製造し、発酵の現場に生活することは清潔、簡素を尊しとし、神棚と仏壇の存在感は極めて大きい。

救荒作物

金次郎先生は寺子屋に通わず、父からの教育を根幹とされた。それは当時の農村の荒廃ぶりを表すのかも知れない。大洪水を生き延びても、活動的な男児に水難はつきものである。治水事業は停滞し続け、上下水道の無い時代の衛生環境も劣悪を極め、小児とりわけ男児の死亡率は、極めて高いものだ。

足柄地方の正月行事の「どんど焼き」のご神事は、地区の道祖神に無病息災を祈るものである。現世御利益に毒されず、往時の天候異変に翻弄される領民の切実な祈りの世界があったことを、子供主体の焚き火の祭典は物語っている。

盛夏、足柄の山野に蔓延るクズ *Pueraria montana* は、林業家の悩みの種になってしまったが、救荒作物の雄は、今なおイノシシの突進力と繁殖力の栄養源である。活力食品、繊維原料としての活用を待たれる。

金次郎先生は、山野の生命力に溢れる植物の生長を観察し、根系の重要性、特に毛細根の発達の有様を「農民」の姿に連想したと推測される。それは、天地に根ざす、揺るぎなき財政再建活動の理念と言えよう。

無血開城の遺産

土木重機も水中ポンプも無い時代に、幕府直営の治水事業は延々と続く。

指導者は財政破綻に怯え、民は無気力に陥るは当然のところ、その絶望と怠惰に打ち克てたのは、小田原城下に蓄積された教養書籍の力に負うところ大。

それは戦国の乱世にあって小田原城が無血開城し、城下が焦土となるのを回避した結果の書籍温存にある。北条五代の遺徳は無傷で徳川幕府に引き継がれ、志あれば農民の子供にまで、古典文献をあまねく行き渡らせる成熟情報社会を実現させた。それは、己を捨て、民を護り慈しむ日本の武人の真の姿である。

幕末の動乱でも江戸城の無血開城が実現している。^{かつかいしゅう}勝海舟 と ^{さいごうたかもり}西郷隆盛の英断により、世界最大の文化都市・江戸の文物の焦土化は免れ、明治新政府は、欧米列強からの分断統治を回避した。

幕臣 勝海舟の二宮尊徳翁を評する言葉に「大体あんな時勢には、あんな人物が沢山できるものだ」と江戸っ子のべらんめい調で語られる事に批判もあるが「文明の生態史観」として知的に俯瞰されたと解釈したい。

新政府の要人となる西郷隆盛も報徳思想を見事に吸収し、後進への遺訓として「租税を